柏崎日報社転載許可済

（1）2022年5月6日（金）柏崎日報　1面　掲載

◆産大レクチャー　ア・ラ・カルト〈175〉

モンゴルってどんな国？

経済学部助教　蒼原　烏瑠吉

産大レクチャー ●●● ア・ラ・カルト〈175〉

モンゴルってどんな国？

蒼原　烏瑠吉

モンゴルと聞いたとき皆さんは何を連想し、どういうイメージを持たれているのでしょうか。チンギス・ハーン、元寇（げんこう）、騎馬遊牧民、お相撲、広大な草原などさまざまなことを思い浮かぶのではないかと思われます。

今回はモンゴル国の事情をいくつか取り上げて相互理解を深めることができればと思います。

モンゴル国は世界で18番目に大きい156万平方キロに及ぶ国土をもっていて、これは日本の国土の約4倍にあたる広さです。2021年の国家統計局の統計によると人口は340万人であり、1平方キロ当たりの人口密度を見ると、日本がおよそ335人に対し、モンゴルはわずか2人です。世界でも人口密度が低い国の一つに数えられます。

ウランバートル市は世界でいちばん寒い首都であり、10月から3月の厳冬期には、日中の気温がマイナス30度以下になることも珍しくはありません。また、大陸性気候で寒暖の差が激しく、真夏の7月の昼間は25度を超える日が多いが、夕方になると雹（ひょう）が降ることもしばしばあります。1年間の平均温度はマイナス2度です。この気候条件に加え、年間降水量は平均約240ミリで砂漠やステップ草原が多く、農業を営むことは大変困難であり、遊牧、放牧に適しています。

モンゴルの牧畜業は、肉食（主に羊肉や牛肉）や乳製品といったモンゴル人にとって不可欠な食材を提供するだけでなく、カシミヤや肉食等の重要な輸出品目を生み出しています。主な輸出先はロシアで、食肉輸出全体の90％を占めていて、残りの10％は中国、イラン、カザフスタン等が占めています。しかし、近代化や人口が増加する都市部を中心に食生活が多様化し、酪農、養豚、養鶏を営む経営者が増加しています。1人当たりの年間肉の消費量で日本はおよそ30キロに対して、モンゴルの消費量は100キロを超えています。

モンゴルと日本の間に外交関係が樹立されたのは1972年であり、74年に文化交流取極に合意しました。90年以前は社会体制及（およ）びイデオロギーの違いによって両国間の交流は限定されていました。そして、90年以後は民主化、市場経済への移行を始めてから現在に至るまで日本はモンゴルの最大の援助国であり、両国間の関係は幅広い分野で着実に発展しています。

日本・モンゴル両国が外交関係を樹立してから、今年で50年になります。両国は、外交関係樹立50周年である2022年を、新型コロナを乗り越え国民交流回復の年とするとともに、これまでの50年を振り返り、次に向けての更なる発展、協力、未来における途切れることのない友好関係を築いていくと思います。

（経済学部助教）

＝毎月1回掲載＝

柏崎日報社転載許可済

（2）2022年5月17日（火）柏崎日報　2面　掲載

◆地域に学び地域をおこす－実践活動レポート－「じょんのび村との連携活動が始まる」

【新潟産業大学】

地域に学び地域をおこす

――実践活動レポート――

じょんのび村との連携活動が始まる

本学は今年の3月に市内高柳町にあるじょんのび村協会と地域振興や地域実践教育に関する連携協定を締結した。

春学期の授業が4月6日からスタートし、2年生の地域理解ゼミナールⅢ地域観光分野（10名）で、じょんのび村の情報発信をテーマに取り組んでいる。

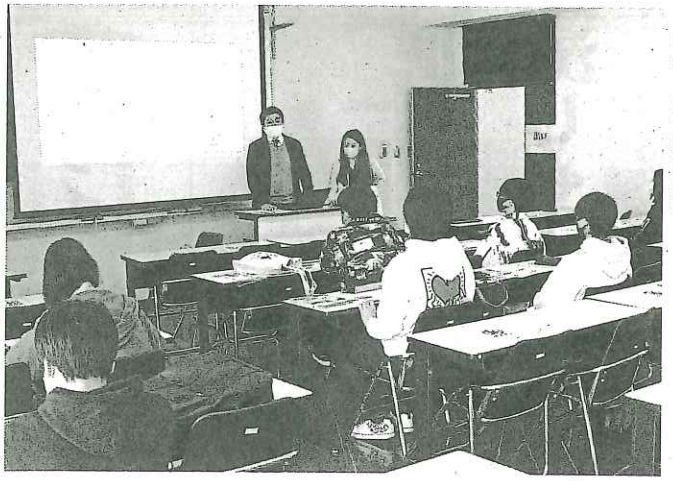
先日の授業では、じょんのび村の吉村英治社長、佐藤美穂セールスマネジャーから来ていただき、映像と共にじょんのび村の施設状況や昨年10月の社長就任時の三つの約束（①3年後の黒字化②地域活性化③じょんのび村PR）や業務計画における強化事項などの説明を受けた。

そして、着任後に取り組んで来た①お客様目線による施設内の清掃・整理整頓、スタッフ面談②お土産処「じょんのび横丁」リニューアルオープン③吊（つ）り橋イルミネーション&クリスマスマーケット④オンラインツアー・お正月プラン⑤冬休み手作り体験⑥春空を楽しむイベントなどに加えて8月までの活性化計画もうかがい、ゼミ生は真剣な眼差しで興味深く聞いていた。

説明を受けてゼミ生の佐藤凪紗さんは「イベントの開催も多く活気があり、最近はクラウドファンディングを始めるなど、じょんのび村の活性化のため常に新しいことに取り組んでいる。自分たちも利用者の皆さんに直接インタビューをして、その感想を発信し、じょんのび村により関心を持って貰えるようにしたい」とレポートをしてくれた。

本学の地域実践教育『地域に学び地域をおこす』につながる活動に期待をしている。

（同大学地域連携センター）



じょんのび村再生の考え方、取り組みの実際を知るゼミ生

柏崎日報社転載許可済

（3）2022年5月31日（火）柏崎日報　4面　掲載

◆地域に学び地域をおこす－実践活動レポート－

「学生たちがボランティア」　～海開きを前に～

【新潟産業大学】

地域に学び地域をおこす

―実践活動レポート―

学生たちがボランティア

～海開きを前に～

土曜日の朝、市内の中央海岸には学生の声が響き渡っていた。新潟産業大学は柏崎マリンスポーツ連絡協議会主催の「春の海岸清掃」に毎年参加している。

この活動は海水浴シーズンを前に中央海岸を清掃し、海水浴客や観光客に気持ちよく柏崎の海を楽しんでもらうことを目的に行われている。

今年は全体で約170名のボランティアスタッフが集まった。本学からは学生や教職員90名が参加し、ペットボトル、空き缶、不法投棄家電などのごみを拾った。約1時間半の清掃で砂浜は見違えるようにきれいになり、今すぐにも海開きが出来そうな仕上がりとなった。

今回初めて参加したのは、本学留学生のムハンマド・アブドル・カリムモンタナロさん（3年、インドネシア出身）だ。

「海岸清掃活動に参加してみて、気分はとても爽やかになりました。参加者全員から柏崎の海をきれいにしたいという強い気持ちが伝わり、まるで自分の家の庭を清掃する家族のような絆を感じました。インドネシアにいた頃も海には行きましたが、きれいな海岸もある一方で、驚くぐらい汚れている海岸もありました。残念ながら母国では公共の場を大切にする習慣は日本ほど感じられません。汚れている海を見て、何も感じないのはとても悲しいです。海をきれいにするのも、汚すのも人間次第なので、海の美しさを守る責任は私たち人間にあります」と活動の大切さを語ってくれた。

当日は曇り空で小雨も降る中だったが、学生たちは柏崎の海をきれいにするために一生懸命活動に取り組んでいた。

今年で3度目のコロナ禍の夏を迎えるが、柏崎の海ににぎわいが戻ることを願わずにはいられない。

（同大学地域連携センター）

清掃活動に参加した学生たち